



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1  
JAPAN  
Tama

國寶



56-4082

御清ひ傘

免

名神

非名の新式號號

あるくめとへま日  
乃神儀者乃神とくにち  
名のよあくと事より  
きをもと良の系よたつ  
称ともいのむすきを  
勅清ゆきの名を主寫とき  
吉日人明神とくふくらみ不  
よわく只神の名よる  
と云事かくあくまきら  
とをやまとととせ今  
て名ふよむ所と云たりさ

あくも御を名御云々を  
人へも往きをへとけとそこ  
はとねとえ成りと音と被  
ゆりもろさめりあやまり  
應れとあくらとおやめと那處は  
うゑあちへと次連よへてある  
あき逃まへ神乃は名をあら  
よへきとまくらまくらまくら  
要ナリ逃へまれむ神より  
神逃とくまわとくまわとく  
もあくよまくよまくよまく  
く神ようすくくくくくく  
取とえもくくくくくくく  
理じくくく式用乃ニテ  
神の夫名をつすよわ  
音首住吉小野山とくらは乃  
名をひそめとも神のい名  
成放不<sup>レ</sup>名不<sup>レ</sup>あく<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>と  
主すり神をわざれゆりよ<sup>レ</sup>  
するのくみとて山賊と云  
山乃まわりあく<sup>レ</sup>後山  
房の名よられも山類よ<sup>レ</sup>  
もあむうの事成命

新布 雜<sup>レ</sup>和布<sup>レ</sup>ハミ<sup>レ</sup>  
名不<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup> 諸<sup>レ</sup>ニ白<sup>レ</sup>

タ<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>のま日小<sup>レ</sup>ま乃字日  
もく<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>新武<sup>レ</sup>  
も<sup>レ</sup>は一切乃因字別吟を  
書<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>日乃<sup>レ</sup>文

よよへこちまく

二二

名木のぬれむる掌を  
同 只一トもあきらめのる  
湘よハ人をめニシムと致す  
トモともば肉をもヘトうき  
めももの肉又本の骨裏を  
のめ山椒のめ身をもつて  
いづりめ置のめやう乃類  
交わるかよ連のやうふをあ  
とれを拂はせりみてうき  
ぬきのして下塗をもつてうき  
めも人をとよ云目のみわ  
よ一作アヒトアヒトアヒト  
リ人をとよして引ひめり  
字ハ人を同よハセウチくあ  
よ一作アヒトアヒトアヒト  
モ人を呼のめとまのめ  
ハわちとえふしん新或イ  
のる精合數とくわくわせ  
まやけまやけ乃原トヨウ里  
多くも度へろく景く能  
やくゆきとわくくもく  
トトトトトトトトトトトトト  
小ちくのねくとくの  
誤ありてもくもくもくもく  
めくえりくやのくの角行  
よ一作アヒトアヒト湘よハ一作  
よスアヒトアヒト湘よハ一作  
あひりわハセトク洞のひ  
ニ包まめりまく

あらわすよりよハ不痛ア痛ア  
トヘムをキテぬるト也れ  
ともキテぬる事ニタクアリ  
マ角ア耳より肩と角アリナ  
キモ能ヨハ經ヨニあるル

見

初不<sup>ア</sup>止<sup>ア</sup>居<sup>ア</sup>居<sup>ア</sup>新<sup>ア</sup>初<sup>ア</sup>初<sup>ア</sup>  
初<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>わ<sup>ア</sup>く<sup>ア</sup>急<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>波<sup>ア</sup>活<sup>ア</sup>  
キ<sup>ア</sup>も<sup>ア</sup>初<sup>ア</sup>池<sup>ア</sup>初<sup>ア</sup>去<sup>ア</sup>ミ<sup>ア</sup>  
ミ<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>ま<sup>ア</sup>と<sup>ア</sup>座<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>や<sup>ア</sup>よ  
ヤ<sup>ア</sup>ひ<sup>ア</sup>人<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>ふ<sup>ア</sup>ト<sup>ア</sup>り<sup>ア</sup>  
不<sup>ア</sup>立<sup>ア</sup>立<sup>ア</sup>と<sup>ア</sup>被<sup>ア</sup>初<sup>ア</sup>  
山<sup>ア</sup>初<sup>ア</sup>池<sup>ア</sup>初<sup>ア</sup>用<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>砌<sup>ア</sup>宿<sup>ア</sup>の  
而<sup>ア</sup>も<sup>ア</sup>も<sup>ア</sup>う<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>ア</sup>と<sup>ア</sup>  
洞<sup>ア</sup>う<sup>ア</sup>と<sup>ア</sup>新<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>家<sup>ア</sup>通<sup>ア</sup>  
庵<sup>ア</sup>乃<sup>ア</sup>舊<sup>ア</sup>洞<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>ト<sup>ア</sup>ト<sup>ア</sup>ト<sup>ア</sup>  
と<sup>ア</sup>ち<sup>ア</sup>門<sup>ア</sup>人<sup>ア</sup>修<sup>ア</sup>用<sup>ア</sup>ト<sup>ア</sup>新<sup>ア</sup>  
を<sup>ア</sup>う<sup>ア</sup>じ<sup>ア</sup>居<sup>ア</sup>よ<sup>ア</sup>匂<sup>ア</sup>を<sup>ア</sup>  
き<sup>ア</sup>は<sup>ア</sup>き<sup>ア</sup>時<sup>ア</sup>も<sup>ア</sup>別<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>ア</sup>  
え<sup>ア</sup>來<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>類<sup>ア</sup>ふ<sup>ア</sup>も<sup>ア</sup>砌<sup>ア</sup>と<sup>ア</sup>是<sup>ア</sup>  
文<sup>ア</sup>よ<sup>ア</sup>非<sup>ア</sup>居<sup>ア</sup>又<sup>ア</sup>庵<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>舊<sup>ア</sup>洞<sup>ア</sup>  
あ<sup>ア</sup>次<sup>ア</sup>運<sup>ア</sup>か<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>ま<sup>ア</sup>て<sup>ア</sup>能<sup>ア</sup>よ  
ニ<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>へ<sup>ア</sup>居<sup>ア</sup>小<sup>ア</sup>も<sup>ア</sup>庵<sup>ア</sup>よ  
も<sup>ア</sup>庵<sup>ア</sup>小<sup>ア</sup>も<sup>ア</sup>次<sup>ア</sup>砌<sup>ア</sup>ト<sup>ア</sup>房<sup>ア</sup>  
あ<sup>ア</sup>う<sup>ア</sup>小<sup>ア</sup>も<sup>ア</sup>也<sup>ア</sup>と<sup>ア</sup>階<sup>ア</sup>砌<sup>ア</sup>や<sup>ア</sup>  
家<sup>ア</sup>種<sup>ア</sup>よ<sup>ア</sup>る<sup>ア</sup>き<sup>ア</sup>庵<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>小<sup>ア</sup>  
お<sup>ア</sup>も<sup>ア</sup>う<sup>ア</sup>移<sup>ア</sup>く<sup>ア</sup>あ<sup>ア</sup>ふ<sup>ア</sup>庵<sup>ア</sup>の<sup>ア</sup>  
人<sup>ア</sup>字<sup>ア</sup>と<sup>ア</sup>え<sup>ア</sup>ま<sup>ア</sup>け<sup>ア</sup>ま<sup>ア</sup>新<sup>ア</sup>  
小<sup>ア</sup>も<sup>ア</sup>ア<sup>ア</sup>う<sup>ア</sup>役<sup>ア</sup>を<sup>ア</sup>も<sup>ア</sup>わ<sup>ア</sup>と<sup>ア</sup>  
あ<sup>ア</sup>う<sup>ア</sup>ま<sup>ア</sup>み<sup>ア</sup>め<sup>ア</sup>か<sup>ア</sup>新<sup>ア</sup>  
座<sup>ア</sup>よ<sup>ア</sup>ひ<sup>ア</sup>う<sup>ア</sup>れ<sup>ア</sup>ま<sup>ア</sup>せ<sup>ア</sup>付<sup>ア</sup>も

あらすすやも持合を  
の邪魔とまくと西文を  
防ぐるを便と初と別  
くの相とおりと防ぐ「初  
式」不る所とものとれ  
ありをも人あり相たり  
物と人家とあるうきみ  
あらすじ然をそねて乃  
ち事とゆめく重ふよゆ  
小浮うくらる氣性うへむ  
き魂ぬもうち「新式」を  
りくへ初定をそしよ  
されも魂又おまうるへ説  
う新式を可用かくねり

るは通可以而好

漆只一名而よ一派よハ二名而  
ひと内之水の多よ不當  
中あるべく只巖ニモリ  
漆よハ岩ニ名而一又名而  
二只巖一もありトシテ  
モくともわをくく一粒  
小ニあらと奉巖トヒト巖松  
ミトク松トのくもニの因  
王生忠是もと人名の名ト  
あり且も山類小もくさく  
少くとも字ナヘ面叶と  
てゆこ巖よも松風土也根  
甲斐ノ称ホ連ふれときへ

佛より面をきく。毎日一色  
上を山からむかひ山のくふ  
とまよわをぬみ後面を  
きて後連よもじく。  
佛よりもねあはぬゆく。刹  
乃まと不薦山がめうきふ  
墨といひとく。まめどろる  
もく計ふく。纏ひそめと  
乃くあり思成院す。山  
のあくまふもく。山の名の  
うちめあるかくら文字を  
あくむりむりの神へうり  
ハ村もくか。かく称る。相  
ふ称氣との称ふみと同  
し。今もうよもじきをきく  
ゆきら

## 三日月

連より夜一百九十九

よ今一あるべく三日月の物  
非物うなまうく入へ聲  
あるべく三日月と計ひ聲  
うち三日月のあらを喰と  
さう人あり非と若めく。物  
ありあらを被とも鈴門のゆけ  
三日月の身代付事場も次  
れ。一名流よ一筋よ一筋よ一  
度三句の筋よ當あき  
とも由代を教とく。是二句を  
乞と要言教よもんとあり  
佛よハ若一筋よ一筋よ一  
かよひきの初の経月の

わがの月 月もとわくと  
わがの月 月のわあくと  
わくとあくとあくとあくと  
乃郡不守有 京都 乃郡  
不守有 京都 乃郡  
乃郡不守有 京都 乃郡  
上京下京 四物遷都 乃京  
平安城治湯治守 はれ下治  
京京西京 京の都と一  
空てあまと清れをあらと  
九重九重とあらかじめよ面とあら  
大空大空不可とあらかじめよ面とあら  
乃京大内山仙洞院の山  
あとの郡九重よせうまく  
もりの洞院の あた乃山  
ひ肉ひ肉ふもわよ筋と漢子 繰  
とよ糸つりめんとあくと  
月の丸経の郡とくふと  
乃みわを鳴る月も竟官  
さく發よつへ別の物のや  
よきこむちる付くとも  
とまくへとも圓府と申うと  
ゆゑが多種の京西治守よ  
可と教もと京都治の二事  
教との圓うれと教よ津く  
もよわと可と申く  
教ふ 有二句申くえわくめ成  
義も只の教と只の教と  
とく教もとく教とあまくめ成  
さるまわよ志教のをつぶ  
みのうきよわくわと申く

あまえと拂よひ面をて庵より  
朝名和小不庵

鶴鳥 あはらうらひ鶴よ面をて庵  
とあれど拂よひせぬまへ  
と豆もくのうな鶴乃字タマヤけ  
やるれど拂よひわと鶴もくに  
乃肉よと仰も文子小竹く  
行を暁とつとたち人か重  
近の餘よへぬも不可庵これ  
寔ほの穿殿空より又鶴も  
とをもききよりひねりと  
うち聖本食奥山上人絶色す  
圓くさく行ゆへよ捨含志  
奥義と極めをとぬとす水  
もじうれとさととぞれりと  
乃木もりをよろり水をみ  
らの水をもあがれりうる  
ある事とくわ物ねき  
ある難と本事の御役あ  
取事よもあらひと

宮 云補祇よ二曾居アニ但  
ひ肉一派ハ名前トモヘ  
言はばくと裏ト一わり拂よ  
中言無事ト多事上うら古事  
え中後えあくと發よ讀而  
名はば名前と那波え  
ホヘ曾居シ名前と那波え  
トあらめくゆきと補祇より  
曾居補祇混亂多き拂

名のうち二罪名を以て  
轉々小さくと漢官一と  
み句と細魚とが生む  
始まつち母三宮を後れ中ね  
名のみあ非神祇非名不當  
人情に宦居のうち乃二句代門  
よもやまを家居非居不官  
乃字より二句もしきうを  
致達附も付くも不善又  
脇のうち荀和もと皆二句  
やわらかよ官荀和白通之  
從事弱あくく致るよあく町へ  
付くも不善人の名よあ  
らよあねるよく云ひきの  
内もうち荀和祇しきよ經  
荀和も云ふねえのくひ代也  
み乃門より

裏小笠打越を端よ向云  
着云笠へ日ふも人よあす  
もさうお宿ねよ付くも不  
善裏ちゆりやよ不付く  
付也小付くも不善裏の後  
やよ不付くも不付く  
も善の宿ねよ付也とて連  
坐ゆりやくもぬあよ付く  
もくか

三字の假名 四字を端源よ

文字假名とも小塙ふと不塙  
と不別あり不塙と文字假名



え事よりかわらまひを  
意方とも我と一まわれは  
もうかとか乃事のくま  
まよふれもやうかく平よ  
あくまくとくま計のまめ方  
とく身もままされと我方  
こくとへくへ一まよを  
あくやの教をニ宣  
ぬと古人をまこととせ  
得くそむりあくあら  
きとのりいのじゆくの御  
ゆくあするをりゆく  
やくへくりたゆくいとも  
えゆきのれもとどま  
くわくらくあれつこく  
あゆゆは離はれゆく  
不<sub>レ</sub>離れてよをへの御  
きゆくニまほくとニま  
船名とて至難しむやこ  
まち山かけ山むちとニま  
ほくとニまとねまくと  
ヨシの文字へうけゆく  
文字と想えゆくと山  
をば人ちた君へあく  
やうのへあくへうくとけ  
くにまをいゆつをゆも  
ものなをまくもゆく  
へえまをとくへ付あくとゆ  
まくまくとくへ付あくとゆ  
くねくねのこまく  
おああくまくくの裏面よ

ありと連よりら浦のより  
ほの信経をほくとあよ清  
乃言おととよすにとく  
かくまくは百鈴潤りう  
たるをんあんぎよ

ミナヒたよらあくみん  
がよ宣あもあつう能く回よ  
ミヨクと面をあへあこ  
ニホ歌とこ鰐野 三れ又  
おうれも清の字のよへ二句  
ミト間ミニ文字ひ字より  
もよんそ清の字のよ二句始  
や若ミ吉野ち白毛居る  
あゆへ清の字をもじらぬ  
熊野も稚児をわがくく

清の字をもじりと  
せわらわ

刀人され ちふじの毎よえ  
人 きの向みみのね  
きこくもふひこくれや  
ぬと成れかこくよせくら  
音余のうよやれれお  
の三句共ぬへ重さを連と向  
くえをき

菊家 美く石清あぬ附の  
季 三月中辰の日  
うち

あわしれと連よ二あれ  
乃ま人倫よりをくし温泉  
いやうじくまゆ ひぢ

んとう機きよあよはる

え

御湯 節中のむ階うかが  
に浴 みづの湯ひまをか  
ねてゆくとけへ室居る  
ふかうとて不當拂のす  
わくとくさとけ 二湯三  
湯ゆくとて居てとむと  
居前こ玉れまへりのう河  
なれといがくめくとつ事  
うまきはと云ふとて  
湯浴とくとくとて魚一は湯一  
魚もわをとくときりとて  
魚もとてとて御同とて  
御よ達くとてとてとて  
もとれよとて不當拂

あらく 之の水のゆるじ  
しまと 回流拂ふ清あたれゆ  
じとえの素うえりと云ふと  
えの水じとふの難拂あ  
じとふとえし水ゆるじと  
と拂ふ清あとのゆるじと  
乃えぬとふと清あたれの  
と云ふとえのゆるじと  
ゆるの神いちられまのゆ  
くらとく

お後小 うとくとくとく  
うとくとくとくとくとく  
うとくとくのとくとくとく  
とくとくとくとくとくとく

酒呑 まもろの波瀬のうき

おくもえり

あきや 売るよ云御の事不

ぬきや 焼と云えぬ御物也

二十九日向ニ又うよ治宣を  
命望ひ小籠と云ハ御の一  
字と高とと演と云御の骨の  
字をもくもくきりね多一  
もよと下酒小舟く吃味下  
まもゆまひ字し酒をみま  
みと云よへりもあ角酒も  
三寸とあり正字に御時奉之  
ハ圓裏人を身と三寸とけく  
吹と云いり名もゆりあまでも  
此巻を去夏あまたもあれま  
をけり計端すら

相もん大裏へ指物をやせそ  
あり面うよ侍のまよきう  
もそちの船も船も義とみゆ  
ふは其産の家因次才よよ  
もくありの

通じく ことこ

こと鳴 指物豆列あ圓小わり丸  
よ山數よあく次位指物列  
乃よ邊し豆列をあ邊よあく

汀 次  
二と二の名はすむ

かくかく 鮎いの字に不端  
くと續よる細ひへとむ

と清の事より其句を丁寧致  
幣の神の事ありく御します  
由産と社擅と曰ひにとが  
神の事よりと云ふとその神主  
乃の神よりと云ふとひりひり  
御人やうへ一色ひきよあ  
とものとお神産と云事すされ  
ともわめく清乃事をと  
付るとはまと云ひまく只幣と  
あくらと計ひゆく清  
乃事は不謬とひらむ御事よ  
御事よ朝と云事付くとひり  
付至不謬事とあり是思  
ひ足てくも清乃事のみ付く  
ときひくとて放放

二  
帝とちれ事の事  
も不若石去門とし  
りしてち去と云事もあり  
事きよハ門よ面をて塗つて  
アモイシレヒ帝乃事事ある  
よ清門と書ハシル事と  
て事の後をうりくたま計  
から根おもた裏乃ねり事  
口戸乃内よ面事と汝事  
天と云事かくする事事  
事ももとやもとれ清名事  
うれきよはと門戸をふ  
事よ帝の事と云ふと事  
との事も清乃事門事事  
事も事んや既に鶴をひの

まよぬも不壇毛も始毛  
毛を表號も付うあめ  
名されども猶く云まとてます  
室あれどもとさうもぬや  
よれ或ふとありこれり  
きくゆうやうのぬうへえゆり  
ひ隨體ゆくみとよ門のま  
と弓ゑふくとてあうとある  
極々毎日來て御室小ト門の  
字とも一向不壇付くも不  
若あ毛をきくもとく合  
多く取りやう毛を取るも  
云名を活毛と云義より付  
ありわと云ひあたらうり  
さくがく行毛宮毛吉乃字  
屋乃えぬも不壇

よお塗毛く多毛ひと海  
まようれと大和乃直丈ハ義  
和毛毛毛小室ううう  
約毛毛毛

かのつと勅と詔と

去れよ活の事  
よる毛をさわくも御毛も法

かと皆二句毛不壇

月毛 祀毛とちねよ一切の活  
乃毛よ不壇一役アニ  
句毛と毛毛とよみくり  
毛をもアニ毛連被御毛  
神毛とおの神社よあら神  
毛とこえ毛アニ口活よすち  
足こよもひ神乃事とく

天子のゆみ小の御代をすと  
すがも連よもうるあまいた  
乃済みのぬくひをとて  
ちゆきみとんきまでろひの  
补み乃代をとらひへまつよ  
見ことおとほ乃字よきくみ  
きくみとらひさくやくあ  
申意見まことねき那より  
ひニタのさくゆも白とれき  
も白くのえこのうりりめ底  
やまとけくニ萬國と補祐乃  
乃とと作みと云は清の字此  
の字清の字は付とも不善毛  
毛と上歎の初シとのまと毛  
え字を一字歎

天子のゆみわくめりく  
あれもひの字をとる字今  
乃とととととととととととと  
後も相む清  
乃字よ付るととととととと  
前もセウて高きくくくくくく  
ゆり

天子のゆみ小の御代をすと  
すがも連よもうるあまいた  
乃済みのぬくひをとて  
ちゆきみとんきまでろひの  
补み乃代をとらひへまつよ  
見ことおとほ乃字よきくみ  
きくみとらひさくやくあ  
申意見まことねき那より  
ひニタのさくゆも白とれき  
も白くのえこのうりりめ底  
やまとけくニ萬國と補祐乃  
乃とと作みと云は清の字此  
の字清の字は付とも不善毛  
毛と上歎の初シとのまと毛  
え字を一字歎

天子のゆみわくめりく  
あれもひの字をとる字今  
乃とととととととととととと  
後も相む清  
乃字よ付るととととととと  
前もセウて高きくくくくくく  
ゆり

九十七

字二句極く無言よあひの  
様子只身の汗毛が立つてゐ

六

却て小  
ぢやう

九

みを みくらひの家  
之攻清拂乃守之  
見山 みの山の浦  
犯山 ほんの山の浦

水よ月夜の月  
みどりの夕暮れ  
おとをひく汀柳の月  
わらしみるさくらの月

三  
引  
く  
も  
の  
あ  
と  
ふ  
写  
繪

もくらむのあとふ 写 真文竹繪  
ましも廻じけり かんくも  
まよありひ肉あひ茎よ  
書物の更年中の美名るう  
文多の申草をかよせ  
うかく不守因たまひ写  
繪も不善と乃字も愚昧の  
文情れ與其とぞりくお詫  
小いめくもれ乃むの古文と  
實文稿 文学者ふの類  
不善いほきとも後う御す  
通ふ 夏語 惠語との略  
も二句たり山語との  
乃文語より山語との  
むかこちもく、行らざり

ちの小も路小より三乞を  
れわしあ乃通るより  
度るのみよ壁路山路  
過三乞

雲小 七匁ニ湯氣ハ少匁を  
少くすに縁乃多不廉  
或殺よわを始  
とくらぬ後也よあくわ  
ととてぬもつゝ付事も  
つゝぬへ面を下端次空  
まちの文院多學など  
さあやく小兎をえり  
ことがういじわらきえを  
見とりと云洞の起名が  
え通の極ゆれを寛よ

あくは汝が御くも不若と  
え絶を下削し

おもゆりくあくと御非  
よもんこ

おもゆりくあくと御  
よもんこ  
かくら体不以合房あくと  
可かりのものよわくは望  
を言ひ際もあくよもわ  
可かべ連次郎の白良アシ  
もかむと本食上人乃安  
めのく慈悲のあくつよ非  
義とあくと安ようか  
きくねうわくと記し

ゆう蝶も小虫のれんあと  
ひくひくとやわらかくち  
波はてたかを現されい虚  
きよからし小身を現す  
も亦みよへとすむ一も波す  
もゆり生れるともかきぬ  
鮮艶よへ全砌きのゆき  
大房も敏かまくとよ葉と  
ふる様もゆりんの因よ  
らしさよ安らぐ力氣の二字  
を付くと金冠やむ  
欲よハ非情のまほのむとてへ  
力と波う事ゆりき後がの  
御方ふもありうとそんとね  
くぬくぬゆくわらうち

今小くからくるを皆二勺  
も月からよけ後と二勺酒と  
多く人にはうり酒樽より後  
と取てふへ不當を言ひ色  
のあらす守をまほんか云ふ  
乃は文書お見えますとま  
やく下小付をまほんかあり  
まし小も御めめめめめめめ  
まくまで酒をまほんか三万  
小家鑿金を、おじふるよ  
もしあふやうに二勺下酒飲  
み付をやうのうれ用意  
まくまくハ斟酌せん

をもとゆき きとのみよすニ  
匂ひあり

御薬 五月十八日百官こ  
レ薬 さくさく薬をもろ

水口まつら まこと薬をもろ  
すまつら

三木の山がまかへくは まくは  
お詫

みく山まつら 七月まもと  
い時のみく山まつら

水口せあす 猪口天井より  
よりあ波

一ノへあ新草一ノへあ無草  
しきハ猪口天井よりあ波

世のあわく川よ猪口天井  
ともく猪口天井よりあ波  
ちと猪口天井よりあ波

角

蓑虫 雜にめぐどまれハ猪  
蓑上りをき

志

阿鬼 秋よ一冬よ一物阿鬼  
一ノ月よ猪口天井よりあ波  
も冬よ一冬の秋よ猪口天井  
もの阿鬼洞の阿鬼洞をも  
病乃阿鬼ち猪口阿鬼の處を  
を猪口波の阿鬼ハ交連方

よひ一社ニ向拂よひまゆ人  
あめ三句てすと町ぬよ町内字  
書内字引くも不苦拂よ  
町ぬよ拂地二句をもぬの敷  
い三句を

塙 只一燒よ一澑一ツニシ拂よ

ハ塙拂るる<sup>ル</sup>變よりひくと  
一あらぐ一便移よ一海も

櫻塙<sup>サクラツカ</sup>塙雲<sup>スカモ</sup>塙塙魚<sup>スカモ</sup>おのる

よ一ツ<sup>ト</sup>室<sup>ムロ</sup>し船<sup>ボウ</sup>す<sup>ル</sup>只一の因

塙本<sup>ツカモ</sup>塙全<sup>ツカモ</sup>塙原<sup>ツカモ</sup>もゆく  
もとぶ波<sup>ハタハタ</sup>す<sup>ル</sup>の

肉<sup>スジ</sup>澑<sup>ツカモ</sup>塙油<sup>ツカモ</sup>す<sup>ル</sup>連<sup>ツカモ</sup>

三ツ<sup>ト</sup>よ<sup>リ</sup>うり<sup>ト</sup>く一<sup>ツ</sup>もく

う<sup>ル</sup>拂<sup>ツカモ</sup>ト<sup>ト</sup>澑<sup>ツカモ</sup>とのまく

ふ二タ<sup>ト</sup>の塙<sup>ツカモ</sup>いはせ<sup>ス</sup>一<sup>ツ</sup>と<sup>ト</sup>お<sup>ル</sup>  
久<sup>ク</sup>ニ<sup>ク</sup>二<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>き<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>き<sup>ト</sup>塙<sup>ツカモ</sup>乃<sup>ハ</sup>室<sup>ムロ</sup>  
四<sup>ノ</sup>亦<sup>ハ</sup>不<sup>ト</sup>す<sup>ル</sup>ま<sup>ト</sup>夜<sup>ハ</sup>の<sup>ト</sup>わ<sup>ル</sup>  
あ<sup>ク</sup>や<sup>ク</sup>ん<sup>ア</sup>あ<sup>ク</sup>よ<sup>ク</sup>よ<sup>ク</sup>一<sup>ツ</sup>わ<sup>ル</sup>  
利<sup>ト</sup>の事<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>塙<sup>ツカモ</sup>の<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>二<sup>ト</sup>  
あ<sup>ク</sup>じ<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>澑<sup>ツカモ</sup>よ<sup>ク</sup>あ<sup>ク</sup>く<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>  
て<sup>ト</sup>着<sup>ト</sup>身<sup>ト</sup>め<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>ゆ<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>き<sup>ト</sup>塙<sup>ツカモ</sup>を<sup>ト</sup>た<sup>ト</sup>  
あ<sup>ク</sup>じ<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>澑<sup>ツカモ</sup>よ<sup>ク</sup>あ<sup>ク</sup>く<sup>ト</sup>う<sup>ト</sup>  
絶<sup>ト</sup>れ<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>身<sup>ト</sup>文<sup>ト</sup>身<sup>ト</sup>多<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>  
耳<sup>ト</sup>よ<sup>リ</sup>ち<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>あ<sup>ク</sup>り<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>二<sup>ト</sup>  
一<sup>ツ</sup>入<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>か<sup>く</sup>ね<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>之<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>す<sup>ル</sup>  
も<sup>ト</sup>れ<sup>ハ</sup>前<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>不<sup>ト</sup>苦<sup>ト</sup>又<sup>ハ</sup>ア<sup>ク</sup>  
し<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>日<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>や<sup>ク</sup>れ<sup>ト</sup>言<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>  
も<sup>ト</sup>や<sup>ク</sup>の<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>澑<sup>ツカモ</sup>ハ<sup>ト</sup>塙<sup>ツカモ</sup>ま<sup>ト</sup>  
を<sup>ト</sup>ぬ<sup>ル</sup>く<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>澑<sup>ツカモ</sup>れ<sup>ル</sup>も<sup>ト</sup>塙<sup>ツカモ</sup>  
面<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>ぬ<sup>ル</sup>も<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>云<sup>ト</sup>塙<sup>ツカモ</sup>の<sup>ト</sup>か  
こ<sup>ト</sup>塙<sup>ツカモ</sup>よ<sup>リ</sup>人<sup>ト</sup>緒<sup>ト</sup>水<sup>ト</sup>色<sup>ト</sup>塙<sup>ツカモ</sup>と

居くハ非ノ傳水ももくら  
燒溫々塗温魚温魚汁葉  
内あづめうもハ非も此温かふ  
小宿小宿山みく温内室よ  
面を塗そ茶の若れ塗<sup>ササ</sup>  
塗<sup>ササ</sup>か枝<sup>ササ</sup>よ縁とつとも味塗<sup>ササ</sup>  
美うもも内よもじきくろあす  
きも塗よ面を塗<sup>ササ</sup>の塗<sup>ササ</sup>のを  
塗梅<sup>ササ</sup>くも塗<sup>ササ</sup>の内され<sup>ササ</sup>同  
れを<sup>ササ</sup>塗<sup>ササ</sup>しねのりんも下<sup>ササ</sup>も  
塗梅<sup>ササ</sup>くも塗<sup>ササ</sup>や<sup>ササ</sup>同<sup>ササ</sup>あ<sup>ササ</sup>温  
庖<sup>ササ</sup>内肉<sup>ササ</sup>連<sup>ササ</sup>と代庖<sup>ササ</sup>内<sup>ササ</sup>よ二  
匁とつとも拂<sup>ササ</sup>よ<sup>ササ</sup>新<sup>ササ</sup>の<sup>ササ</sup>  
不<sup>ササ</sup>塗<sup>ササ</sup>不<sup>ササ</sup>塗<sup>ササ</sup>の<sup>ササ</sup>いわり<sup>ササ</sup>  
塗<sup>ササ</sup>燒<sup>ササ</sup>目<sup>ササ</sup>計<sup>ササ</sup>下<sup>ササ</sup>拂<sup>ササ</sup>と<sup>ササ</sup>と<sup>ササ</sup>と<sup>ササ</sup>と<sup>ササ</sup>と<sup>ササ</sup>  
葬<sup>ササ</sup>場<sup>ササ</sup>と少<sup>ササ</sup>腹<sup>ササ</sup>と云<sup>ササ</sup>と<sup>ササ</sup>

居住乃ひゆう<sup>ササ</sup>又<sup>ササ</sup>系<sup>ササ</sup>の町<sup>ササ</sup>  
温<sup>ササ</sup>内<sup>ササ</sup>と<sup>ササ</sup>あ<sup>ササ</sup>君<sup>ササ</sup>と<sup>ササ</sup>包<sup>ササ</sup>神<sup>ササ</sup>  
と<sup>ササ</sup>居<sup>ササ</sup>不<sup>ササ</sup>も

廉一<sup>ササ</sup>からニ<sup>ササ</sup>と<sup>ササ</sup>一<sup>ササ</sup>拂<sup>ササ</sup>よ<sup>ササ</sup>  
ろくと<sup>ササ</sup>交<sup>ササ</sup>よ縁<sup>ササ</sup>くと<sup>ササ</sup>  
笠<sup>ササ</sup>室<sup>ササ</sup>廉<sup>ササ</sup>角<sup>ササ</sup>雞<sup>ササ</sup>廉<sup>ササ</sup>野<sup>ササ</sup>室<sup>ササ</sup>雞<sup>ササ</sup>  
うち入<sup>ササ</sup>まし<sup>ササ</sup>而<sup>ササ</sup>も<sup>ササ</sup>經<sup>ササ</sup>廉<sup>ササ</sup>の室<sup>ササ</sup>  
と<sup>ササ</sup>それ<sup>ササ</sup>依<sup>ササ</sup>向<sup>ササ</sup>神<sup>ササ</sup>経<sup>ササ</sup>ふ<sup>ササ</sup>生<sup>ササ</sup>數<sup>ササ</sup>  
小<sup>ササ</sup>も<sup>ササ</sup>も<sup>ササ</sup>廉<sup>ササ</sup>内<sup>ササ</sup>因<sup>ササ</sup>之<sup>ササ</sup>也<sup>ササ</sup>の<sup>ササ</sup>也<sup>ササ</sup>  
あ<sup>ササ</sup>か<sup>ササ</sup>の後<sup>ササ</sup>を<sup>ササ</sup>用<sup>ササ</sup>り<sup>ササ</sup>側<sup>ササ</sup>う<sup>ササ</sup>  
麻<sup>ササ</sup>野<sup>ササ</sup>室<sup>ササ</sup>も<sup>ササ</sup>佛<sup>ササ</sup>不<sup>ササ</sup>も<sup>ササ</sup>也<sup>ササ</sup>も<sup>ササ</sup>不<sup>ササ</sup>も<sup>ササ</sup>不<sup>ササ</sup>も<sup>ササ</sup>  
人<sup>ササ</sup>傳<sup>ササ</sup>こ<sup>ササ</sup>那<sup>ササ</sup>人<sup>ササ</sup>有<sup>ササ</sup>廉<sup>ササ</sup>も<sup>ササ</sup>乃<sup>ササ</sup>馬<sup>ササ</sup>志<sup>ササ</sup>  
の<sup>ササ</sup>ほ<sup>ササ</sup>あ<sup>ササ</sup>の<sup>ササ</sup>も<sup>ササ</sup>羊<sup>ササ</sup>皆<sup>ササ</sup>雞<sup>ササ</sup>も<sup>ササ</sup>り<sup>ササ</sup>  
非<sup>ササ</sup>生<sup>ササ</sup>數<sup>ササ</sup>つ<sup>ササ</sup>ま<sup>ササ</sup>廉<sup>ササ</sup>の<sup>ササ</sup>も<sup>ササ</sup>も<sup>ササ</sup>

わと入山もあせとさと枯木と  
りもありもへ難いとくろ  
故にうのこえたり致どく  
もえしかをあくと難い道も  
う古更に干麻葉の内麻  
は二も難い或ひあくどくゑ  
移或ひげりそくめく  
く一あよも秋生數下り  
内名ふれ名ひに外生數よ  
もあく次反会麻の字よりも  
面をてぬり窮端麻あくわ  
下りえまく下崩とけいざる  
まく野の字とへくどう  
たり植れよ二句もさられ下

崩れの下あも圓おしまき  
植れよ二句も本内名あく  
りしわ植れよ二句火のト  
筋ち名ふ乃更こと代の後  
くのあくへりつも新  
およト筋と計わく植れ  
よが筋を煩てわらふ野  
原と不入くもトあく  
祠去よ取く云よぬうまく  
茅御さん本殿さん御丸  
屋あくもくまよあ成  
生あくねあくと與  
ト崩とも祠をまくと厄と  
あく壁う原うよ限とゆ  
ちま世の小舟のあ列うつる  
人地をうかぎうちあうけよ

久志の傍岩の山をぬ登りき  
峰と山巻海川の急よも下  
前もてあらうのうちよ聖う  
原うきくまいじれすきこと  
え後ちくらく愚飯続され  
し拂よハ新氣の下有  
ニ計もと人すとね宣約  
もび経歎すかへあは  
トるよ 下秋下紅葉あれ御  
トるよ とよ山、轟りあくみ  
とのえまそもとどく  
ふくよき云放よあきとも  
さくあくもくわくかくさく  
ひトのまは鴨を人を不  
審あらもししく自刃のあ  
学あきゆくわ

あこの字連よれを姫と  
面を可姫けと發トよ姫  
ても一度よみこありとつひ  
てもひ角林を一間ある  
程とありとへ只一句であ次  
言ふあことありありも  
ありとみるくもけと聲よ  
みありもみるくも陽よ一度よ  
碧野下野とけたみる  
かえすそそ衣の裾へとそ  
壁よれを塗下のまう  
すそ野衣のすそこち去  
ありとすそハ襟乃一字  
あらかよ二句もと

ト海 衣數とあく乃事と  
わを帶てて纏綿の字  
れを帶ててあるへ  
ト綿とく名前乃ト綿乃  
実又てきうやうの衣數よ  
わくまかひもまふ三包の内  
うち也ト綿とるも、ト綿の  
実花乃ト綿あるくほほま  
あくこまくへきゅうと  
ト海をもじて下れ事も非  
あらば乃死より  
あらば乃死より人をまわ  
あらば乃死より人をまわ  
も水をすむ二勺もより

ひ綿とく信まひもくふま  
思ひとく連ふもあきとせ  
よへ勿縫ことまみあひゆの浦  
とく不平者もやうの名の浦  
始やうも連よへ那ようもあ  
めうもうも縫ともあひゆを  
つむねとく今一もとまれも三  
匁もくも思ひもくも不平を  
又思ひ新のあひゆをもくも  
名前乃信まひもくも各あ  
たれもおき籠也あひゆのうち  
ち名前乃信まひもくも各あ  
たれもおき籠也あひゆのうち  
おも縫ひくも思ひ新の浦  
おも縫ひくも思ひ新の浦  
おも縫ひくも思ひ新の浦

乃信支一ハねをうへてあひ  
シ一ハねよ邊惠とくらむ色拂  
は乃恵辱見立の夜をうへりと  
と云敷こえ一ハちぢれをふ  
を志のふとも云たまひもおな  
うらめ紙く吟味く接  
合をへて法場とのと

ものあやまつて

きくも回あ山敷よ二弓  
ゑのあののち修まとり  
まうるゑのぬをくみあ  
のぬ乃郡をく云うりも  
惠まよ恵乃あひふち  
えも不善あひふち大  
略ち恵乃あひふち

惠事よ面をゆく

志乃恵擣 奥列信支邦  
経されし種也よめく次也  
をあをされし段ふも恵事  
とどうよどりみくあく恵の  
ゑとへよめりひねよあ  
恵擣を恵事よわをゆくと  
連よあまくと織よへ面を可  
通すもあくうわをまくと  
よあくすの敷詰うりと  
恵事よわこどもけまつて  
もりとへよく恵事の事

小毛庵

馬代空より二只二疋上  
より馬廻乃衣隨處走  
難の様一疋より三疋  
走の車也と申すわ  
乃空又乃西と從て後を走  
よ字も右の二の空  
ひるあつて  
二のじうとへら  
きとおの教しとたの  
とひくとん付とも不

清湯うわわ  
とよゆうわわ

久の縁よわ今もはく  
ゆゑぬとへぬりてく  
うわくまくまくとく  
もくもくふくふく  
もくとくあくあくとく  
とくとくとくとくとく

志乃め小 翔と約二句を  
右新歌よ変えども其と外  
純底連歌吟め不夕  
時ふ端へと称くも作事ゆるを  
乃ふを不知道理を主取ま  
ぬかとゆもしくかへり

あらめふ日のみ一句入  
乃とハ面を二箇あるのとく  
ありよ物もふきくわゆゑ  
不苦心のめとくぬうこれ若  
うちあふも鶴取りよあす  
がよ鈎且よ打鉤と縛や  
歌ちりぬよ天河より不縛  
いそれ事く  
かよあらべらす二句を  
一の字も字もを  
あらへもくのあまみへ連す  
て産一百種のねざれど海  
よハニ句あよト  
あらふいちらもく三体  
あらふ  
まなむすりまく  
まくまく二句を  
おせりも燐こもへおのま  
ここもえト  
相ひまつまつふ一の字  
の字引されまことま假名  
よきうもく  
あまくぬ道小え車  
わらう  
跡よハ面くろまもどり  
不盡もれぬと半日か  
乃あらぬ三乃あと但道  
といふよしきぬの圓ぞ

あくま三の内

あくま聲

坐懷しあれな

えのうちあらわすあらわ  
ちあはようこりと坐懷す  
ゆくゆきよゆくと坐懷す  
乃連懷す多りと連り  
面をぬくとあまくと拂は  
七句可去

あくま身

あくま身ゆりぬよしり

風袖よこひたり

とゆきとゆきとゆきとゆき  
ゆめくちと面をぬくとゆき  
とゆきとゆきとゆきとゆき  
ちゆきとゆきとゆきとゆき

ゆめくちとゆきとゆきとゆき  
ゆめくちとゆきとゆきとゆき

とゆきとゆきとゆきとゆき  
とゆきとゆきとゆきとゆき

乃下よ鷗一巣のよーとお波  
里もすましと拂よへ鷗ニス若  
か一望ニ勺の舟とねどる  
あへ一極山數がもよまう  
ぬ鷗ときくもぬ鷗ありた  
と人を川鷗池内中鷗倒す  
のちひきも鷗も水をさり  
よきく山數よみす  
津鷗鷗えさう鷗臨深の  
鷗ふの圓のあちえあくも  
山數水もよあくす入圓乃  
名よあくさ被とも津鷗  
原蓬つ鷗室の鷗山數が也  
よあく次四巻乃鷗も水也  
計ゆく山數よあくす津鷗  
色はうきしぬり京よあく

只うきうち鷗とね鷗小舟の  
數まて山数もよもりく山  
數あくもよきく山鷗と  
え仰も山數もよもりく素  
のうも鷗也あくもよもりく山  
數も水もよもあくすと鷗  
車のよわり排列乃へあくへ  
うりゆく山數ふもあくす  
**白尾鷗** うしのづか **鷗**の鷗とよ  
ま鷗をほく時政教名さ  
ちを鷗のきくもよもとと  
白羽ゆく鷗へしめ事あり  
えむと鷗のくよをのうる  
のをこと残らとよく山

へひきうふまうあめんゆみ  
儀けり

志賀の山遊

悲毛花と絶歌

のくの悲絶

萬葉 又ニ萬葉種乃名よ  
のちく難シ元くも  
とも萬葉のいよもくもあ  
匂桂きもれの名よ欣あ  
名よをゆき色を世とよあや  
ちくゆきもれ日よすを云  
とく牡丹は混乱さうゆ乃書  
ふも管鬼くわんきおもねれ家性善が  
万安方あ成さむよろいと萬  
とけくら御もる事よまと一わを  
くらひと萬とえあるべ

牡丹より萬葉對く不審  
恐木り萬葉よ萬葉の名よ  
名もも萬葉とすとせ  
うのもれともぶのわ名  
小萬葉と付もへ津端わ  
あく玉籠ゆきと月持と  
ゆもとれゆく場ばと云す  
とハ不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>御家後ごの後ごの後ご  
支ぬをわ名よえいへとま  
とまとつゆり又絶よ萬葉  
をする事よと云はば  
うりもうまくもうりよ  
れのりとあくたりゆよを  
つひあくわくとつり極旅  
か書ひまくもあく旅也別  
獨樂の私わたくしも二七日ゑと

ヤセハヨリ業ヨリ近リト大  
日高ヨリミテ余いレモリ  
モクシヨリトヨアリ津高  
見ルシルヘ難解也

清風 雜ノ物ノソリ又  
只あと波も難シ品アリ  
波す波と因事アリ  
難シ清あ能アリヒトニ  
シムニカラ謹清アリトアリ  
而も清々水邊もわを邊  
ナツリ難ノ面と邊と清  
アキタニシテヨリ玄字付勺  
計極くアキタニヨ筋筋の  
清あるハニカラモシキよ  
ヒリノミモニ勺清アリ

きくらえとまつまもと匂  
あらじちよあ山麿

ああと  
あぬよひゆ

紫戸 紫戸紫の爲紫  
一場何進も非獨物  
居可し他別紫氣紫也  
あり此被也のアリ角  
く角或よ紫戸とおちよ  
もくと寔よアラ次紫  
の名紫本乃アリ紫也紫也  
スアモアリ一筋よもアリ  
アヌアリウラメアリニ車  
ううち紫ニカラムキハ湘  
よハ袖をフムニカラム

をあよ多幸のち枝う  
枝毛よだらば紫もくそれま  
はまよだらば雑木のたまよ  
わらさる成毛山紫もく紫  
ト里との小枝うくつるを  
等極也取角

志毛り 通のちもくよま木  
乃枝をわしき  
玉毛レ非枝わらと山紫  
みとの臨文字トリニイシ葉  
わりく通よすくねはる  
わたりくねとも不吉號  
又角一清秀キヨマハナモ  
不蘿

### 連懷ノ名之向焉一句

時志て付秋矣事す  
望新式の經しひぬやうる  
ぬへひもあらあら連懷の  
絆されともかへぬちじ  
ゆくゆくえひへとあ  
計端く連懷はふる壇と  
事へばうむ世とあく  
りうきんのまほらふくふ  
句ハ連懷ふもス益ふも脚  
ひふ新式よりくても依  
勾詠もく一概よくく不當  
連懷とくとくし

零トモモモモ 新式小山の  
非邊地とゆうとそく思

家道ゆきゆきの昔乃事と不  
八句ありとまととととと  
里ひ義山の菊山ハ不段や  
ちきち秋の捨波の野よハ  
家不動をうるふ多ク人  
ト人をもむれをとくへ  
流すと事よ給ふと下満  
連波よれをて海を下に有  
乃ちうるをれを連波よへ  
ナウキの事下野乃事下源  
地よあく

宿 一屋二弓の宿とろくも  
うりありあり宿不居  
ナリ又其上虫乃由宿不居  
も田あ膳宿池田乃宿後  
乃宿名田が宿を人情と  
人情と人情と云句ハ那  
人情居計と寺乃因同  
宿人情とあこ西のよ不  
堪宿情非居不非人情  
人情ナリ宿食の居  
非居不宿業居不人情  
而人情一宿室一宿室も  
人情小もあく次宿世因か  
辰宿亦八宿と曜師(偏)  
色木の里の鳴ナリ那布  
不居とめつたお湯ノ一  
宿よニあく

シテアリ連はれよ  
漁よハ面をノムニエニモ  
阿シトク オ紙を丁寧  
シタメクレと曙の紙  
船附シテタ所トシ  
スルを漁よハ三包を  
魚をさきゆうと  
キ余の漁船アリ

御祇とく松森と

皆三包を

あわせとく あわせと  
皆ねど

あわせとく あわせと面を端  
きみかねじ或日ふへるる次  
はるうれとあらまわよ一  
あくとさく入れよ一  
坐ハありとくもあらう  
ねと漁よハ面やくまと被よ  
うとくあらうよとれども  
さあくとあらうよとれども  
面を入らうよとれども面  
あらあらうよとれども面  
七可<sup>セシマ</sup>とくとくとくとく  
をうゆへよと白帆<sup>シロハタ</sup>と  
船よしりあらまわよと  
かも夕も不善<sup>スナガ</sup>日よも  
乃日乃朝<sup>ヒタチ</sup>向乃字<sup>カタシ</sup>

魚之公乃肩也。白毫へ丸乃  
肉也。身也。白糸もあの人  
が名をあらざよもあら  
ふもりと云ふのくわに字  
ふもりとくもくのあ

鷄 鷄は鳥也。人をひる  
たる鷄とも鷄之のめと

きわらひ山雞も出でても

あり。次に鳥の字ふを  
圓を爐と又鷄圓。肥活もくも  
人鳥名とりと鷄圓と云ふよ  
てやひりも名をつくる事  
乃鷄よめり鷄の肉を鷄薄  
も唐日本の和乃鷄圓より  
お始からぬ今夏は減るま  
鷄三乃門入り鷄はもじも鳥

内名小わらもれを鷄か  
もうれど水色をのれど  
小わら鷄との肉

櫻のさわらもさわら櫻を摘  
むくとくみぬし  
櫻也。難じるゝもゆくも  
圓が傳焼どとれど非櫻也  
櫻と呼へ難く。あら化もあ  
まく只秋姿もゆゑ  
むもさす別内也。よも  
な雲櫻り。余よと云句の名  
まれも人ぬもゆく人あらず  
あらこのもとくらへ難うり  
正もよろす只人ぬすく人

卷之三

わが身のまゝの事  
わが身のまゝの事

うふうれい雅と仰し物  
之をも葉も果も絶  
むりや山り山  
生も不うるあら

是れりとすとすあはせ  
あへれ矣ひるをす  
ゆがてまくと年の朝  
をこち歎歌よもげと  
うらきうらのゆきゆ  
もひうきよふとまくと  
のうちよふとまくと  
てよそへのゆきわくと  
ゆきよふとまくと  
ゆきよふとまくと

あはれんとひと云ふから  
荒れ教と云ふは甲野山の  
てよリゆゆる組難より  
橋約よ二句こえあうとけよ  
もとゆきへゑよやうりら因  
直又あまういそりへつそれ  
と野山よふのえまとそ  
へゆくもあまういそりへ  
あうち人をい連歎あらわめう  
もよ橋約よ二句こゑ世難  
のあまういそりへゑよ  
きくへす非橋約只繁  
昌のひくらもま葉のちげ  
主ふとあくとえよ取  
橋約よ二句せうくらも  
きくへゑよふなれもあら

洞のむまよあくらに洞のむ  
りとあまよまよううらり  
やうの事と一言のたすみ

ト仰る

かげも野山あくらに 独れ  
ぬと他多らげも野山と  
いふ種也よきもく

くくとあとの数百約

一を主言と新成の非主言  
と代名と代の了局などとくら  
やうのうゆまと一度一弓  
の地こそも拂拂もあくらに  
弓をもよとへくわる  
けめらき百数を鷹も

食ぬは西置を安産  
あやうの洞穴はふはう  
それを皆トみくらむを  
あきがくと雖ももよもよ  
あんあくらのむかへゆ  
え洞を如のみとけもかの  
ふるくわら數のまふぬ  
もむよしわくわくもよも  
もくもくのまよへ二弓も  
如のみのくへをよせられ  
そねをくく一弓よ二弓も  
つづらひ如のみよもか  
くくのまよとへまよ  
てをよせられ

S. 1118

う  
鷦  
物をもねるのを  
あくびくもね

四百一

平家



